愛光NEWS
2025年6月

２０２５（令和７）年７月３１日発行
（編集）愛光本部
（TEL）０４３－４８４－６３９１
（HP）https://www.rc-aikoh.or.jp/

6 月は、2024 年度を締めくくり、次の一歩を踏み出す大切な月となりました。理事会や評議員会では事業・決算報告が承認され、役員や評議員の改選も行われました。また、これまでの貢献に感謝を伝える表彰も実施されました。同日に開催された新理事会では新たな理事を迎え、法人は新体制のもと、これからの歩みに向けて心新たにスタートを切っています。

□事業経過など（2025.6.1～）

3	火	業務執行会議/秋まつり実行委員会
4	水	本部スタッフ会議/5S 研修/広報委員会/地域食堂委員会
5	木	メンター委員会
7	土	理事会
10	火	感染症対策･衛生管理委員会/防災委員会/避難訓練
12	木	中途採用者交流会
16	月	佐倉圏域事業部実績会議
18	水	地域食堂ともいき/感染症研修/栄養改善委員会
20	金	ボランティア委員会
22	日	評議員会/評議員選任･解任委員会/理事会
24	火	コンプライアンス委員会/本部実績会議
25	水	障害者実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ/後援会運営会議
26	木	高齢者福祉事業部実績会議/研修委員会

■月報から

□　**ボランティアコンサート**　（ルミエール）

28 日にボランティア主催のコンサートがなのはな広場で開催された。毎年この時期にルミエールで楽しい演奏をしてもらっている。コロナ禍で途切れてしまっていたが、昨年から再開し楽しい音楽を届けてもらった。最大の特徴は利用者の好みを熟知していて、演奏をきいた利用者を笑顔にしてもらっている。ルミエールでは音楽の行事はとても人気があり、様々な音楽に合わせて手を叩いたり踊ったり声を出したり感情を表現する機会となっている。これからも楽しい音楽イベントを続けていきたい。　（ルミエール課長　原　宏之）

□ **最後までその人らしく**（めいわ）

利用者 Y さんが 17 年間過ごされたご自身の居室ベッドで 70 歳の生涯を閉じられた。職員、看護師数名が見守る中での静かな一瞬であった。わずか 1 時間前には問いかけに対し反応があったという。本当に静かに、苦しまれず息を引き取られた。昨年末あたりから体調を崩され、2 月に一時呼吸状態が悪化し救急搬送された。搬送先の医師から「先天性のスタージーウェバー症候群にともなう気道閉塞、重度の無呼吸症候群」と診断を受け、治療の可能性は低くいつ呼吸停止の状態が訪れるかわからない、呼吸器装着しての延命がご本人にとって望ましいとは考えにくい、との説明がご親族に行われた。ご親族の決断として延命治療は希望されず、ご本人が住み慣れた場所、めいわでの看取りを行う方向となった。そこから緊急時対応のためのマニュアル（呼吸停止発見からの対応―状態確認から上司・嘱託医・親族への連絡経路、御身体の安置に至るまで）を至急作成し職員に周知した。ただそこから内服薬の減薬調整等行った結果、睡眠、呼吸の改善がみられしばらく安定した期間を過ごすこととなり、外出や散歩等日常生活を楽しむことができた。このまま緩やかに時間が過ぎると思われたが、恥骨骨折の痛みから寝たきりに近い状態が数週間続き、ようやく痛みの緩和、車椅子での座位を取れるようになったものの姿勢の保持や嚥下機能の低下がみられるようになった。亡くなるまでの半年間、目まぐるしく日々の状態が変化し、都度、医師・看護師と相談・連携をとりその時々の最善の支援を探し対応してきた。そうして迎えた最後の朝は唐突に訪れたが、前日まで散歩し、会話し、好きなコーヒーを味わうことができていた。ひとの人生を語ることはおこがましいが、「Y さんらしい最期だったね」と話す職員も多く、Y さんの姿、関わった職員の姿からあらためて学ぶこと、感じることも多かった。お別れ会には多くの利用者、職員に参列していただきたくさんの思い出話もうかがった。あらためてご冥福をお祈りしたい。　（めいわ施設長　片野　明美）

□　**FUKUSHI　JOBS に参加**　（リホープ）

７日（土）　佐倉市社会福祉協議会が主催する福祉の仕事を身近に感じてもらうためのイベント“FUKUSHI　JOBS～ふくしのしごと～in 佐倉”がイオンユーカリが丘にて開催された。リホープ・めいわの職員５名とリホープの利用者１名が参加し、視覚障害者体験、点字体験、手工芸班・創作班の作品や園芸班の花の販売などを行った。視覚障害者体験では、白濁（白内障などの見え方）・視野狭窄（緑内障などの見え方）をシミュレーションレンズで体験した他、アイマスクをつけて小銭の弁別、文字を書くという体験を行った。点字体験では点字の仕組みを説明し、実際に点字を打ってもらった。打った点字を利用者が読み、正しく打てているかをフィードバックした。参加者とコミュニケーションを取りながら丁寧に説明していた。佐倉西

高校の学生がボランティアとして参加し、元気に呼び込みもしてくれたため、小学生から高齢の方まで約 80 名が体験した。視覚障害のある家族がいるという方には、音声時計や音声体温計などの情報提供をすることもできた。買い物ついでのちょっとしたイベント体験ではあるが、障害について、福祉の仕事について少しだけ身近に感じてもらえる機会になったのではないだろうか。　（リホープ課長　稲垣　直子）

□ 避難訓練　（山王の家）

9 日　避難訓練実施。今回は宿直職員一人の時間帯に地震発生。その後火災も発生した想定で、火災通報装置も利用しての訓練を行った。今回初めて訓練に参加した職員であること、これまでは世話人も参加していたが今回は全くの一人で行うため、係や見学職員と一つ一つ動作確認しながら進めた。利用者についてはほとんどいつもと変わらない状況で、ヘルメットも概ね自ら被り、避難時は利用者同士で声を掛け合う姿が見られ、落ち着いて避難していた。職員は火災通報装置を使って消防署とのやり取りを行い、想定の質問に手順書を使用し答えることができた。緊張していたが、これも必要な経験である。いざというときに備えできるだけ多くの職員が経験できればいいと考えている。年に３回ある貴重な訓練をよりリアルなものにするために、普段からやれる事「ヘルメット着用の練習」や「居室の整理」、「もし地震が起こったらどうするか」など確認出来ればと思う。　（山王の家管理者　岡本　綾子）

□ 入居希望面談　（佐倉市よもぎの園）

宮前に建設中のグループホームについて、入居希望があったご家族の面談が始まった。今では指定管理受託後から聞かれていた「親亡き後の…」この話題がより現実的な状況にもなってきている。今回、希望を出されてきたご家族の高齢化は顕著で 70 代後半から 80 代の方々もおりこのタイミングで入居できればとの切実な想いも垣間見えた。

何より一番に考えることは利用者の意思であるが、利用者を取り巻いている環境も選考の重要なポイントとなる。今回は 10 名定員のところ、定員以上の希望があり個々の状況を丁寧に聞きとり、入居者 10 名を決定することができた。今後、内定通知を送付する流れになる。

グループホームの土地探しに難儀した頃は計画通りに進むのか不安であったが、いざ建築が始まってからは加速度的に色々なことが動き始めている。今後は運営に必要な書類作成なども迅速に進めていかなければいけない。動き始めた流れに同調しながらやるべきことを成していきたい。　（佐倉市よもぎの園　主任　近藤　真一）

□ 家族会主催講演会　（ワークショップかぶらぎ）

6 月 21 日（土）ワークショップかぶらぎ家族会が「精神障害者 親亡き後、どうしてる？」と題して講演会を開催した。家族会員の方々とはかぶらぎのスタッフとの懇談会などを通して親亡き後への備えや利用できる福祉制度についてこれまでも情報提供を進めてきており、一定の理解があるところだが、今回は具体的な事例を講師に語ってもらうことで、当事者のリアルな「暮らしの様子」をイメージできる機会となった。事例の中では、親の死により一時的な状況混乱や整理すべき手続きに本人だけでは対応が難しい状況が生まれたが、支援者とつながっていたことにより、それを乗り越えて暮らしを落ち着かせていく様子が語られた。後日、講演会に参加した家族のレポートを読ませてもらったが、そこには「支援者

との関係の蓄積が大変重要と感じた。」と記されていた。個人的にはこの「関係の蓄積」という言葉が心に残った。人を支えているのは充実した『制度』に他ならないが、実は当事者や家族を直接的に安心させ、支えているのは『関係』の充実なのではないか、という視点である。福祉に携わる我々は、制度を届けてもいるが、互いに顔を合わせ、その人となりを理解し、その人らしさを支えていける「関係」を築き上げていくことにも大きな意味があると理解しておきたい。　　（ワークショップかぶらぎ　主任　宮部　和樹）

□ 暑さ対策　（ジョーの家）

梅雨の時期にもかかわらず、30℃を超える暑さが見られるようになり、入居者の体調管理に注意をしなければならない。気温の変化に鈍感な方への衣類調整やエアコンの温度説明など、具体的な声かけをすることで熱中症予防を図っている。また、通所から帰宅される前に世話人の方が部屋のエアコンを入れることで、室内での熱中症予防を図っている。今後も、こまめな水分補給の促しや体調確認など、熱中症への注意喚起をおこなうことで、入居者の健康と安全を守っていきたい。　　（ジョーの家　髙橋　健）

□ 感染症対策訓練研修　（はちす苑健康管理室）

今回も東邦大学医療センター佐倉病院感染対策室　寺井幸子氏を講師に迎え研修が行われた。基本的な感染対策を学んだ。手指消毒については手袋を着用し講師が準備された絵の具を各自消毒液に見立て手指消毒の手技を行った。絵の具が付いていない部分があり、手指消毒が正確に行われていない事を反省した。実施訓練は、ノロウイルスによる嘔吐物処理を行った。行う事により、再度初心に帰り手技を思い返す事ができた。今回、コロナウイルス感染症に罹患した職員・利用者、疥癬に罹患した利用者もおり、タイムリーな内容であった。

（はちす苑健康管理室　主任　阿部　美樹子）

□ としとらん塾開催　～モルック＆ふまねっと～（南部包括支援センター）

５日（木）、１３（金）に佐倉市の委託事業である「としとらん塾」を開催した。今回は楽しみながら介護予防ができる「モルック」と「ふまねっと」を実施した。「モルック」はフィンランド発祥のアウトドアスポーツで、木製の棒（モルック）を投げて木製のピン（スキットル）を倒し、得点を競うゲームである。年齢関係なく楽しむことができる。５月に介護予防リーダー交流会でも実施しており、投げたり、得点を計算したり、今回も大いに盛り上がった。

２週目の「ふまねっと」は、ふまねっとサポーター指導の下、基本ステップから始まり、最後は参加者で歌を歌いながら、それに合わせてステップを踏みながら、時にはハイタッチして、参加者全員で盛り上げてくださった。

今年度も、年間１０回としとらん塾を計画している。整形外科の専門職に依頼したり、毎年恒例の順天堂大学の学生にも協力していただきながら、参加者皆さんが元気になれるような企画を考えていきたい。　　（南部地域包括支援センター管理者　森　由美子）

□ 南部地域福祉センターA 棟が休所　（南部地域福祉センター）

予定通り「南部地域福祉センターA 棟」は 6 月 1 日から休館となり、B 棟での教室・同好会の活動がスタートした。それまで A 棟で行ってきた貸館業務をほぼすべて B 棟の部屋に集約し、利用してもらわなければならないため、当センタースタッフと各団体の代表者、教室の講

師との連絡調整を幾度と行ってきた。6 月 1 日の再スタートは、とても順調とは言えなかったが、多くの混乱もなく、その日は終えたというところであった。しかしながら、ここ数日を経過し、意外なことに気づかされることがいくつか出てきた。それは、以前から少なからずセンター職員でも感じていたことで、大きな文字で作った案内表示板や、掲示物を作っても、なぜか利用者は見てくれないようなのである。それらの案内を全く見ないまま素通りし、事務所の職員にダイレクトに質問等で話しかけてくることが多いのである。ゆえにその都度直接案内するしかないということであり、相互の負担が大きいことが課題として出てきたところである。

今後もこれらの課題を踏まえながら、部屋の案内表示や動線などを考慮し、お互いに困らないように対応していきたい。　（南部地域福祉センター　青山　秀人）

□　おばけやしき実行委員会　（佐倉市南部児童センター）

夏休み恒例企画「おばけやしき」。今年も小中高生を対象に募集を行い、「おばけやしき実行委員会」を立ち上げた。応募してくれた子どもたちは、小学生 23 名。その主な顔ぶれは、昨年のおばけやしきに来場した子どもや経験者たちである。「怖い話が大好き！」と、とめどなくアイディアを語る子もいれば、「工作が得意！」と意気込む子もいて、頼もしいメンバーが集結した。そして、みんなで話し合った結果、今年のテーマは「メリーさんの電話」に決定した。これは、古くなった人形を捨てた少女のもとに、捨てられた人形「メリー」からの電話がかかってくるという怪談である。活動はテーマ決めから始まり、担当分担、ポスター制作などを手分けして進行中である。今年は 3、4 年生が中心メンバーとなり、元気いっぱいに取り組んでいる。ただ、まだまだふざけて遊びたくなる子どもたちもいて、限られた時間内で企画をまとめる難しさと楽しさが交錯している。終わった後には、やりきった達成感に満ちた子どもたちの笑顔がきっと見られることだろう。その日を心に描きながら、悪戦苦闘の「おばけやしき実行委員会」を全力で乗り切ろう！　（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□頼れる2年生　（寺崎学童保育所）

ダンボールや空箱を大量に使った工作を 2 日間に分けて行った。被り物や車、お家などダイナミックな作品からアクセサリーやビックリ箱といった手の込んだ小さな作品まで個性豊かであった。その中、2年生の児童がみんなが遊べるように…と、ダンボールでピンボールを作ってくれた。ボールの転がる先を調整しながら長い時間をかけて作っており、完成する頃には 1 年生の児童が「すげー！」「やりたい！」と、集まっていた。無事にピンボールができあがり、動作確認をするとすぐに1年生が遊び始め盛り上がっていた。その人だかりの中には「僕は工作しない！」と言っていた児童もおり、楽しそうにピンボールで遊ぶ姿が見られた。工作はしなくとも、一緒に遊ぶことで行事に参加できたことを嬉しく思う。2 年生には本当に感謝しかない。　（学童保育所主任　平野　美幸）